

---

# 滅亡サンタ

はまな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

滅亡サンタ

### 【Nコード】

N4704I

### 【作者名】

はまな

### 【あらすじ】

クリスマス。少年少女の他愛ない会話、そんな中でもサンタクロースは死に絶え、蘇り、微笑みかける。の、かも、しれない。

## (前書き)

\*種別的には短編ですが長さとしては掌編、千数百文字程度のものです。

「滅亡サンタ……」

クリスマススイブ。降りしきる表日本の豪雪を補習の終わった教室の窓の外に見ながら、少女は呟いた。肩まで真っ直ぐに伸びた髪と知的な瞳も、今は何処か翳っていた。

「どうしたの？」

少女の向かいに座した幼さの残る少年が微笑を浮かべたまま問いかける。二人は気の知れた友人同士だった。

「……サンタって何者か知ってる？」

虚ろな視線を窓から少年に移して少女が問いかける。

「……ええと……どういう意味で？」

困ったオーラ微量入りの声音で少年が口籠ると、少女が後を続けた。「うちはお父さんだったわ。サンタはサンタじゃなくてクロスでも無くて血縁者だったのよ」

「まあ、そうだろうね」

「滅亡だわ。滅亡サンタ・サンタ滅亡よ」

沈黙。少女が中身の無いパックジュースをずそぞと啜る音のみが響く。

「…私はね、好きなのよ。あれ、サンタってやつ。幻想の実体化したやつみたいで」

「へえ」

「一夜にして世界中の子供に好きな玩具配って気づかれずに去っていく雪中の衝撃幻想。でもね」

とそこで一泊置き、くわっ！と目を開き、少年にぐぐいと顔を近づけ言う。

「アレはお父さんだったのよ！ つまり嘘。大嘘。激嘘。プロ級よ。だって十五年も騙し続けたんだもの裁判にしたらきつと勝てるわメ

ガトン級の実刑が下るわよ！ 幻想は幻想だから幻想で、幻想的な父親の行為は幻想じゃないのよ！ だって幻想的なものは“的”だから幻想そのものじゃないもの！」

一気に言い切って、しゅん、と肩を落とす。覇気の無い様子で、少女は声量を落とし再度口を開いた

「……昨日ね、今年のサンタは何くれるだろうって両親の前で言ったらね、お父さんは酷く冷めた眼差し向けてこう言ったわ。『それは、俺、だろうが』って」

「まあ、確かにちょっと酷いね」

「絶望だわ…このクリスマス二日間は今年から底なし沼の頑張り鱈的悲劇に彩られていくわ…」

「まあまあ。意味分かんないし」

笑顔で相槌を打ち、少年は自らの鞆に手を入れる。

「はい」

とん、と少女の前に小さな箱が置かれる。少年が出したそれは、綺麗に装飾され、リボンまでかかっていた。少女がきよんとしていると、少年がゆっくりと語り始める。

「中学も終わりなんだからさ、家のサンタはそりゃ終わるよ。でも」と、小箱を差し出し、

「こんなのは、これまでにはなかったでしょ？」

開けるように少年が促し、少女がぎこちない手つきで中身を取り出す。

「うわあ……」

小さな時計だった。可愛らしく装飾のなされた金属製の腕時計。

「要はバランスなんじゃない？ 相応な時に相応なサンタが来るんであってさ、それはきつともう夜中の幻想人じゃないんだよ。多分しばらく呆けた様にプレゼントを見ていた少女は、いきなりびしい！ と少年を指差して言った。

「サンタクローセスト！」

「……は？」

「最上級よ最上級。最もサンタなサンタ、サンタクローセスト！  
サンタクローセストサンタクローサーサンタクローセスト！ 君は今年  
最もサンタだわ！ そうね、うん。これは確かにこれからしかない  
クリスマススの形だわ」

先ほどまでとは一転してにこにこしながら時計をいじくって、はたと気づいたように顔を上げ、続ける。

「でも、君は？ もうサンタの正体知ってるわけよね？ 私、お返しのプレゼントなんか無いから不公平だわ。君のサンタだけじゃないことになる。由々しき問題だわ」

「あはは、いや僕はいいいよ。頼まれもしないもの勝手にあげただけだしね」

少女はしばらくうー、とうなりつつ渋面を貼り付け、数秒後、溜息と共に打開案を述べた。

「…明日、何処か行こつか。食事とか、何か。お礼つてことですか」  
突然の申し出に今度は少年が虚を突かれる。その顔にほんのりと朱が差す。少年は一瞬固まり、すぐに満面の笑みを浮かべて頷き、少女を指して、言った。

「サンタクローセスト」

(後書き)

数年前に書いたものです。冬の静かな温かみが出せればいいなと思っただのですが、掌編の長さでいい物を書くのは凄まじく難しいなと実感しました。こういう長さのものもたまには書いていけたらいいと思っています。読んでくださった方有難うございました。

やっぱり長編のほうが書きやすいやい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4704i/>

---

滅亡サンタ

2010年10月12日01時56分発行